サッカー授業における戦術的知識の獲得をねらいとしたボールゲーム教材の実践的研究

－中学校１年生を対象とした効果検証－

冨岡　宏健（広島大学大学院）

１．目的

本研究の目的は、戦術的知識の獲得を企図した中学校 1 年生におけるゴール型のボールゲーム教材を開発し、その効果を検証することである。

２．研究方法

１）対象者 : 対象学級は X 中学校の 1 年生 2 学級（男子 40 名、女子 35 名）であり、そのうち全ての調査に参加した 68 名を分析対象とした。

２）調査方法 : ディスク型ボールを教具として用い、試合人数を 3 人対 3 人に縮小化した全 11 時間のサッカーの体育授業を実施し、その授業の効果を検証した。

３）分析方法 :

・診断的・総括的授業評価を援用した単元の学習内容の妥当性に関する質問紙調査

・戦術的理解テストの実施による戦術的理解度に関する調査

・動画解析による生徒の運動技能に関する調査

以上 3 点の分析方法について Wilcoxon の符号順位和検定により解析した。有意水準は 5%未満とした。

３．結果と考察

１）　中学校段階における戦術的知識獲得に及ぼす教材の影響

戦術的知識テストの結果は、単元末で有意に上昇していた（p<.01、r＝-.31、p<.01、r=-.33、p<.001、r=-.50）。また、GPAI スコアも単元末で有意に上昇していた（p<.001、r=-.45）。このことから、戦術学習の手法を用いれば、中学校のサッカー授業においても試合の経験を通して戦術的知識を獲得するとともに、それをもとにした状況判断能力の向上につながる可能性が示唆された。

２）　中学校入学段階におけるゴール型ボールゲーム教材化の視点

診断的・総括的授業評価の結果において、総合得点が､単元末で有意に上昇していた（p<.01、r＝-.38）ことから、授業実践として効果的であったと考えられる。また、戦術的知識テストの結果や GPAI の結果を踏まえると、多くの生徒にとって戦術的理解度の向上や状況判断の達成感を味わうことができていたと推察される。以上のことから、中学校入学段階におけるゴール型ボールゲーム教材化の視点として、教具の工夫や試合人数の縮小化などを用いて、戦術的課題を明確化することが重要であることが示唆された。

４．結論

本研究では、中学校 1 年生を対象としたサッカー授業において、戦術的知識の獲得や意思決定やサポートなどの運動技能の向上が認められた。このことから、教具や試合人数の縮小化によって戦術的課題を明確化することは、中学校 1 年次のボールゲームの授業では重要であることが示唆された。

５．主な参考文献

秋山和輝・岡出美則（2020）中学校 2 年生男子のハンドボール授業における戦術的知識の学習可能性の検討．スポーツ教育学研究、40（2）: 61-75.